

善知識の意義

平原 晃宗

『教行信証』「化身土巻」には、
然愚禿積鸞建仁辛酉曆棄雜行兮歸本願

(定親全一・三八一頁)

とある。この表白は、法然との値遇による決定的な回心において
仏弟子親鸞が誕生したことを示している。親鸞にとつて善知識で
ある法然との出遇いは、個人的経験に留まるものではなく、生涯
を決定する出来事であり、仏弟子としての歩みが方向付けられた
といつてよい。仏道の出発点として善知識との出遇いは決定的な
意味を持つが、その出遇いが単なる過去の思い出として語られ、
また自力の歩みが終了し、他力救済が即座に完成されたというこ
とではない。むしろ、仏道を歩む上で「帰本願」した信の内容が
新たに問題となり、善知識との出遇いを不断に確認していくこと
に善知識の意義があるといえるであろう。これらのことは「化身
土巻」にある善知識積の位置から明らかにできるのではないだろ
うか。

善知識の意義を説く善知識積は、真門積の引用文として位置付
けられており、名号執持を明証する経釈が引用された後に述べら
れている。このことから善知識積は、第二十願の明証の展開であ
ることが了解できる。

第二十願は「至心回向の願」として『大無量寿経』において、
設我得仏十方衆生聞我名号係念我国植諸徳本至

心回向欲生我国不果遂者不取正覺

(「化身土巻」所引『定親全一・二九六頁])

と説かれている。そこには、諸々の善本・徳本として名号を称え、
これを回向して、浄土に生まれようとする、衆生における最も執
拗な自力執心性が読み取れる。つまり名号に帰しながら、真に帰
することができない人間の内面の問題を示している本願といえよ
う。したがって、この願において親鸞が見たものは、本願に帰し
て生きる人間の、あるいは親鸞自らの内面の問題の発見であつた。
親鸞は法然との値遇において、「雑行を棄てて本願に帰」したの
であるが、依然として定散自力の心を完全に払拭しえないで、そ
の底に執拗な自我性の陰影があることを見たのである。ここに、
名号の功德を己が善根と執し、自らの功德の本として固執する自
己の実相を、第二十願の機在り方として捉らえたのである。

このように第二十願が明証され、続いて善知識積が説かれた後
に、親鸞は以下のように押さえる。

真知專修而雑心者不獲大慶喜心故宗師云無念報
彼仏恩雖作業行心生輕慢常與名利相應故人我
自覆不親近同行善知識故樂近雜縁自障障他
往生正行故

(定親全一・三〇八頁)

ここでは善導の『往生礼讃』を引用し、第二十願の機が専修にし
て雑心であることの理由の一つとして、善知識に親近しないため
であることを説いている。そうであれば、逆に第二十願の機を救
済せしめる一つの用きこそ善知識になるのではなからうか。この
ことは善知識積にある『涅槃経』の一文から了解できよう。そこ
ではまず、

①如経中説一切梵行因善知識一切梵行因雖無量説善

知識^{チシキ}則^{ナラバ}已^マ撰^{セン}斥^{シツ}②如^ニ我所^カ説^カ一切^カ惡^カ行^カ因^カ雖^モ無^ク量^ニ若^シ説^ク邪^カ見^カ則^モ已^マ撰^{セン}斥^{シツ}③或^シ説^ク阿^カ耨^カ多^カ羅^カ三^カ藐^カ三^カ菩^カ提^カ信^カ心^カ為^シ因^ト是^レ菩^カ提^カ因^ト雖^モ復^シ無^ク量^ニ若^シ説^ク信^カ心^カ則^モ已^マ撰^{セン}斥^{シツ}

【定親全】一・三〇二—三頁・番号は筆者が付したもの

と言われている。ここには①一切の清浄なる行の根本は善知識に尽きること、②悪行の因こそは邪見が根本たること、③菩提の因は信心であることの三点が説かれていられる。仏道を歩む上で清浄なる行を行う因が善知識となるのであり、逆に邪見に落ち入ることとは善知識に従わないことが述べられているともいえる。そして菩提の因である信心について『涅槃経』では「信不具足」をもつて以下のように展開される。

又言善男子①信有二種一者信二者求如是人雖復有信不能推求是故名爲信不具足②信復有二種一從聞生二從思生是人信心從聞而生不從思生是故名爲信不具足③復有二種一信有道二信得道是人信心唯信有道都無信有得道之人是名爲信不具足④復有二種一者信正二者信邪言有因果有弘法僧是名正信無因果三寶性異信諸邪語富闍那等是名信邪是人雖信弘法僧寶不信三寶同一性相雖信因果不信得道是故名爲信不具足是人成就不具足信

【定親全】一・三〇三頁・番号は筆者が付したもの

①は信だけでなく求、②は聞だけでなく思、つまり信心の内実を推求すること、常に思うことが述べられる。③は仏道を信ずるだけでなく、得道の者の歩みを信じている。④は信正と信邪について述べられ、最終的に得者、つまり仏道を主体的に生きた者、善知識を信じなければ信不具足に陥ると述べられている

る。ここでいう「信不具足」とは決して不完全な信ということを示しているのではない。「弥陀如来回向の眞実信心」である限り不完全なる信は成立しないのである。我執・邪見に基づくため「信不具足」になるのであり、このことは名号の功德を己が善根と執し、名号を称え、これを回向し、浄土に生まれようとする第二十願の内実を示している。しかし、信心を推求し、善知識を信じ、その教えを聞思するという四つの教示を踏まえることにより「信不具足」とはならないのである。善知識の教えを聞思することにより我執・邪見が無くなるのではなく、むしろ自力執心から逃れることのできない業縁存在であることを常に覚醒させられるのである。つまり、この文を総じて言うならば、常に信心を推求し、善知識との値遇が現在において聞思されることにより信の徹底があることを示しているのである。それは善知識の教法、すなわち親鸞でいえば「速やかに生死を離れん」という命題に対して「ただ念仏」というおおせを常に聞思し、推求することにより自力執心の身が明かされ、その身を自覚するところに信心が成り立つことを意味するのである。

以上のことから、親鸞にとつて善知識、すなわち法然は、仏道を明らかにした師であると共に、その後、親鸞が聞思道を歩む上での基点となった。善知識が単に過去において感激した思い出の人というのではなく、常に値遇、つまり善知識から与えられた「おおせ」が現在において鮮明化され、聞思するところに善知識の意義があるといえる。

【註】①『尊号眞像銘文』『定親全』三・六六頁

②『選択集』『眞聖全』一・九九〇頁